

社会文化の過程としてのエコミュージアム

—現代社会における議論をめぐって

おお はら かず おき
大 原 一 興

(横浜国立大学大学院助教授・日本エコミュージアム研究会事務局長)

はじめに —コミュニティ・文化遺産・持続可能性

2000年5月、ブラジルのリオデジャネイロ州サンタクルスの町で、第2回エコミュージアム国際会議が開催された¹⁾。会議のテーマは「コミュニティ、遺産、そして持続可能な発展」で、この会議は、「ラテンアメリカ・カリブ地域の博物館学と持続可能な発展」をテーマとする国際博物館学委員会ラテンアメリカ・カリブ地域委員会²⁾との共同開催として開かれたものである。

ここで言う「遺産」の内容は、ある領域³⁾における多種多様な対象を指すのであって、自然環境や歴史的建造物などの物理的な遺産だけではなく、無形の文化財や生活文化、民間伝承、創作芸術なども含まれている。

この国際会議には、4大陸18カ国から、またブラジル国内15州から専門家200人以上が参加したが、30年前にエコミュージアム(仏語でエコミュゼ)という言葉を生み出したユグ・ド・ヴァリーヌも出席し、各国の博物館学者により議論が展開された。その内容は、テーマどおり、エコミュージアム学や博物館学が、持続可能な社会の発展のためにどのように関与するか、そしてその遺

1) the II International Ecomuseums Meeting. なお、第1回は1992年国連人間環境会議の年にリオ市内において開催された。

2) 第9回 ICOM-LAM: 国際博物館会議(ICOM)の専門委員会のひとつ。

3) territory というキーワードがエコミュージアムではもっとも重要な存立基盤となっている。活動範囲であり対象となる一定の地理的広がり、地域を指す。街区単位から広範ないくつかの自治体にまたがる地域までさまざま、規制の行政区域に必ずしもこだわらない。2カ国にまたがることもある。

産やコミュニティはどのような役割を果たすか、という点にある。とくにラテンアメリカ諸国における文化遺産保護と近代産業による開発行為との両立の難しさ、それを切り開くための方法として、コミュニティ学習活動の重要性などがくり返し提案された。ヴァーリンは、持続可能性の概念はコミュニティを良い状態で維持することと同義であるとし、地域住民の内発的な力を活性化するためのプログラムづくり、すなわちブラジルの教育学者パウロ・フレイレのように「意識の開発をデザインすること」の重要性を指摘した。エコミュージアムのようなダイナミックミュージアム、プロセスミュージアムは生活文化の価値を高め、それを次の世代へつないでいくのだという。

この会議の任務は、単なる討議だけではなく、21世紀へのラテンアメリカ・カリブ諸国の持続的発展のための博物館学のアジェンダを作成し、また会議の行われたサンタクルスの町を元気づけることも含んでいた。この町には、1995年の町の法律によって根拠づけられた「マタドウロ文化的街区エコミュージアム」が1997年から活動を行っており、今回の会議の主催をつとめた。このエコミュージアムは1992年の第1回エコミュージアム国際会議時に「サンタクルスの文化的な遺産を保護すべきである」との提言を受けて、リオデジャネイロ市が強く働きかけた結果、実現したものである。

マタドウロとは食肉解体処理工場のことである。この工場の本部として使用されていた建物群は皇帝により建設されたもので、リオデジャネイロおよびブラジルの歴史を語る上でも重要な歴史的遺産として、またこの地域の産業の流れを大きく変えた近代化遺産としても重要な建築物でもある。食肉処理工場周辺の鉄道、その駅や労働者住宅も一体的に、この町のアイデンティティーを確認する遺産として、つまり一群の建物などからなる「文化的街区」として保全されるべき対象と考えられている。エコミュージアムはこの場所に拠点を据えて、地域内にある他のさまざまな地域遺産や地域活動の価値を、地域住民に知らしめることを通じて地域のアイデンティティーを形成していこうと、さまざまな活動を行っている。

サンタクルスには19世紀にはブラジル皇帝の休養地としての別荘があり、

マタドウロの他にも、眼鏡橋や学校などの歴史的建造物も多く、エコミュージアムと一体となった歴史研究組織がこれらの調査やガイドを行っている。他にもイエズス会修道院、噴水、ドイツの飛行船ツェッペリンの格納庫をもつ空軍本部や、公立学校やサンバ学校などがエコミュージアムと統合的に活動連携をはかっているのである。

マタドウロに隣接した倉庫建物などには、現在貧困層が居住しているが、彼らに対してその歴史性や価値を認識してもらい、むやみな破壊をしないよう働きかけている。また、かつての労働者住宅建物群は現在工業高校が教室等として使用しているのだが、その生徒たちには、ブラジルおよびこの町の歴史を語った劇を演じるよう指導し、彼らがそれを自ら演じることによって、若い世代にこの土地の意味を実感してもらうという活動などを行っている。

サンバ学校も重要である。体育館のような大きなホールにおいて、カーニバルに向けて老若男女が毎夜練習をしているのだが、そこは地域社会の交流の場であり、近隣意識の結束を固める場であり、少女たちの晴れの舞台でもあり、世代間に知恵を伝承する場でもあり、何よりそこで展開される踊りにはコミュニティのアイデンティティーを強化する意義がある。夜な夜な練習され演じられるサンバというのは、インディオや奴隷制に触れたブラジルの歴史をストーリー化したものであって、ただ刹那的に歌って踊るものではないのだ。踊りと音楽の渦の中に巻き込まれていくのは地域社会の歴史、アイデンティティーで、ここはまさにコミュニティの持続する統合的な活力を再確認する空間としてエコミュージアムの優れた一部分となっているのである。

ここでは、具体例の紹介についてはこれぐらいにとどめ、他の事例紹介は別の機会にゆずることとして⁴⁾、近年のエコミュージアムの現代社会における意味についての議論を紹介したい。

4) 詳しくは、大原一興『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会、1999年、またはDavis, Peter: *Ecomuseums*, Leicester University Press, 1999等を参照されたい。

エコミュージアム活動と周辺分野

まず、エコミュージアムの周辺領域の活動や組織との違いについて考えてみたい。たとえば歴史的街並みの保全や環境保護運動とエコミュージアムは何が異なるのか、について考えてみることによってエコミュージアムの理念が浮き彫りになるはずである。

エコミュージアムそのものを厳密に定義することは難しいのだが、ここでは、エコミュージアムの概念上の特徴を既存の博物館や地域活動の類似概念との関係において、筆者なりに整理したものを紹介したい。まず、エコミュージアムの理念において重要な特徴は、ある一定の「領域 (territory)」=「地域」を主要な対象としていることである。そしてこの特徴には、2つの側面が考えられる。すなわち、ひとつは手法的特徴としての地域社会・住民との一体化、つまり「住民の主体的な参加」であり、もうひとつは形態的特徴としての地域内の各種遺産の保全、つまり「遺産の現地保存」である。「領域」というキー概念のもとに、両者をあわせ持ち統合化した博物館活動がエコミュージアムであると言えよう。このように考えると、

H (heritage: 地域における自然環境、文化遺産、産業遺産などを現地で保全すること)

P (participation: 住民の未来のために、住民自身の主体的参加による管理運営)

M (museum: 博物館活動、すなわち調査研究・収集保全・展示教育普及の一連の活動)

の3つの要素を兼ね備えて、それらがバランス良く整い、かつ一体的に密接なネットワークを組んでいることがエコミュージアムの理想的な姿である。この理想像から考えてみると、結論から言うと、日本におけるエコミュージアムの中では、現在のところ、この3つの要素がそれぞれの力を発揮しあい、対等な関係で相互に協力している事例はきわめて乏しい。

たとえば、HとPの交わった部分には、各地で里地や里山を守ろうとする

運動があったり、歴史的街並みを住民たちが保存する運動などがある。これらの地域においては、点や線としての活動だけではなく、地域全体の博物館活動が加わればすぐにでもエコミュージアムに成り得る。また、PとMが交わった部分には、地域住民のアイデンティティーを確認するための博物館活動を積極的に行い、住民参加による調査、展示などを試みている博物館の事例がある。この活動が、博物館の外部に広がり、地域における自然や文化遺産などの現地保全活動と結びつけばエコミュージアムと言えるだろう。また、MとHの交わった部分には、地域に点在する小さな歴史遺産や工場、博物館などのネットワークを組んでいる地域もある。これは、エコミュージアムとしての典型的な形態はすでに整っているため、住民参加によってそれぞれの点在するサイトを運営し管理していけばよいということになる。

博物館学としてのエコミュージアム

当たり前のことだが、エコミュージアムは博物館活動の一種である。しかし残念なことに、日本のエコミュージアムを標榜するところの多くはこの原点を忘れてしまうようでもある。確かにエコミュージアムは伝統的なハコモノの博物館とは異なっているが、その活動の理念・目的は、施設という実体にとらわれないがゆえに、既存の博物館以上に純粋に博物館的であるとさえ言える。

改めて博物館活動とは何かをもう少し考えてみたい。博物館はICOM(国際博物館会議)の定義によれば「社会とその発展に貢献」することを目的とするものである。地域住民の社会ニーズに応え、市民参加と意思表示のための機関として機能することが、持続的な「生き続ける博物館」としてのエコミュージアムの本来の役割なのである。

さらに博物館はモノを媒介とした教育を提供する社会教育施設という視点も重要であり、収集保全・調査研究だけではなく、バランスよく展示・教育普及の活動もなされることが必要なのである。これらの一連の活動が連続してスパイラルアップすることにより、さらに活動が充実していく。

それゆえ、エコミュージアムは単なる「遺産を活かしたまちづくり」という

表現ではなく、そこに教育の手法が加わっていなければならない。遺産を材料として、地域住民の意識を改革することにより、結果的により良いまちをつくっていく技術なのである。つまり、博物館の機能はまさに人間の変革にあり、これは社会教育であり生涯学習の場なのである。しかしここで、エコミュージアムにおける教育を、けっして堅苦しく考えてはならない。フォーマルな教育機関の提供する教育ではなく、地域住民の自発的な学習ニーズにより、自らの学び合う場をつくる生成的な活動、不定型教育 (non-formal education) の活動の一種と考えて良い。エコミュージアムの教育的役割については、また、コミュニティを変革させる「触媒」であるという表現がよくなされている⁵⁾。つまり、エコミュージアムそのものは変化せず、存在し関わることによって利用者である住民が自ら別のものに変容していくのである。材料となる遺産も変質したり目減りすることもない。

一方、日本では博物館に対する認識が必ずしも正しいものではない。博物館という時代遅れで不要になったモノの保管場所であったり、単なる展示場や観光名所であったり、概して固定観念は偏っている観がある。英国でも、コミュニティの住民みんなが博物館に関わると言う、住民は自分たちが博物館の一部に属してしまうことに抵抗を感じるのだという⁶⁾。これらのことから、博物館としてのまちづくり=エコミュージアムは、まだ多くの人から理解されているとは言えず、今後しばらくは、正しい認識を広めることに努力が必要であろう。

さて、博物館学 (ミュージオロジー) としてのエコミュージアムの理念を表す言葉にはこれまで、エコミュージオロジー、社会博物館学、コミュニティミュージオロジーなど、いろいろな呼び名が使われ、エコミュージアムという名称の他にも文化公園 (cultural park) や近隣博物館など、さまざまな固有名があたえられてきた。むしろ発祥の地フランスでも、エコミュージアムという魅力的

5) Varine-Bohan, Hugues de: "A 'fragmented' Museum: the Museum of Man and Industry, Le Creusot-Monceau-les-Mines", *Museum*, 25, 4, 1973, pp. 242-249.

6) Haan によるコメント、Davis (1999), p.143 による。

な名称に、本来の理念からかけ離れた集客志向の実体も少なくないことが指摘されている⁷⁾。

同様の目的に向かう実践例を総称した適切な言葉がこれまでに見あたらず、世界的なネットワークとしては、それらの実践の基盤となる考え方を示す「ニューミュージオロジー (新博物館学)」という言葉を使った MINOM (国際新博物館学運動) が 1984 年に発足している。サンタクルスでのエコミュージアム国際会議も MINOM のメンバーが中心となって運営をした。

本稿執筆時には実はまだ公表されていないのだが、2001 年 7 月に開かれる MINOM のワークショップでは、テーマを、「領域博物館学の政策、実現と発展」とすることが企画されている。ここで新しい言葉「領域博物館学」なるものがカナダの P. メランから提唱されることとなる予定である。これは、新博物館学運動の中に位置づき、ソーシャルミュージオロジー、コミュニティミュージオロジーの思想に立つ実践の手法であり、参加プロセスにこそ目的をもち、社会文化アニメーション、平等への参加、歴史的な時間と未来に開かれたアイデンティティ空間の統合プロセスの再活性化に向けた、道具としてのミュージオロジーだという。この具体的な先例がエコミュージアムや近隣博物館と言われるものだとしている⁸⁾。

これらのことから、領域=地域そのものはその地域住民のエンパワメント (活力創発) の材料やきっかけにすぎず、それを活かす方法が博物館活動であることがわかる。すなわち、エコミュージアムにとっては、文化遺産や伝統などの継承や保全が最終目的ではなく、活動を通じて得られる住民活力の開発こそが目的なのである。

7) Varine, Hugues de: "Ecomuseum or Community Museum? 25 Years of Applied Research in Museology and Development", *Nordisk Museologi* 1996.2, pp.21-26.

8) 2000 年 11 月に P. メラン (Pierre Mayrand: MINOM 設立メンバー) より送られた書簡による。なお、MINOM は、Mouvement International pour une Nouvelle Museologie の略。

エコミュージアムの現在 —コミュニティ・グローバリティ・イニシアティブ

さて、あまりに地域社会コミュニティについて集中して言及すると、一方で、地域限定的な閉ざされた思考の限界点が指摘されてしまう。

地域コミュニティに無批判に埋没することは危険なことである。それは、下手をすると、せっかく建物の壁を取り払った概念であるエコミュージアムが、別に地理的壁をつくっただけのことになってしまうからである。

あるいはまた、おのおのの独自の文化を尊重するふりをして、文化相対主義の落とし穴に陥り、隣接領域に無関心をよそおうことも危険である。地域エゴを正当化し自己満足的な「エゴミュージアム」に陥る危険性がある。対話の無いところに発展は期待できない。ネオリベラリズムの美名のもとに、新たな民族主義、右翼勢力の台頭、優生思想の復興などを許してしまうヨーロッパの近況をみると、事態は深刻化していると言わざるを得ない。

ベレーグ⁹⁾は、コミュニティのアイデンティティーを追究するエコミュージアムの陥りやすい問題と危険性について、次のように6点を挙げている。

- ① そこに住み同時に自身の文化を研究することは誰にとっても難しい
- ② アイデンティティーを研究することは他のグループに対して排他的になりやすい
- ③ 保存と発明と開発のバランスはデリケート(例：まちは凍結保存できない)
- ④ 覆い隠されていた記憶やものがあらわになるときの沈黙(過去の負の遺産を表現しようとするときの強硬な反対や隠蔽工作)
- ⑤ エコミュージアムとその職員の成長はコントロールされるべき。その成果と同様に、地域の政治の道具につかわれないように
- ⑥ このような博物館の評価基準は経済的な価値ではない。本当の利益は精

神性や意識の発展である

いずれにしても、コミュニティは求心的にアイデンティティーを確立しようとしつつも、いくつかの尺度で自己を相対化する手続きを踏むことが必要なのだと言えよう。

フランスでは、アソシアシオンが運営主体となるものを第三世代のエコミュージアムと言うが、この設置・運営方法の可能性が発見された70年代後半は、比較的好景気のフランスという時代背景において、大量の「小さなエコミュージアム」ができ、これには「小さな国家主義者」の幻想が便乗しやすく、その地域の独自の価値やその優秀性を絶賛する保守的地域主義者たちの運動の「小さなホームランド」づくりに終始してしまったことなど、エコミュージアムが批判の対象となったことがある¹⁰⁾。

また、最近の文化人類学では文化を決定する者は誰かという問いが発せられているが、エコミュージアムにおいても、専門家・研究者の役割やそれに関してホンモノ性(authenticity)を担保する方法という課題もしばしば議論になる。結論から言うと、それらは最終的には地域住民の決定に委ねるのだとするのがエコミュージアムの立場と思われる。しかし、問題は結果ではなく、つまり何がホンモノかという判定に意味があるのではなく、それを誰がホンモノと評価するのか、誰が価値を見いだすか、お互いの意見の交流やまた着地点を見いだしていく合意形成のプロセスこそ意味があるのではないだろうか。

エコミュージアムは、文化そのものを固定化したものと捉えていない。また、モノそのものよりも記憶を重視するので、客観的な価値づけは外部から測定しにくい。基本的にはイニシアチブをコミュニティの地域住民にゆだねているので、生成される文化は流動的であり権威からはかけ離れた存在となるが、いったん生成された集団的な記憶は力となって新たな価値観を生み出すことにもなりうる。しかし、その予測は一般には難しい。

9) Bellaigue, Mathilde: "Local Identity in the Process of Globalisation the Ecomuseum Questioned (Finding the Signs of a World Rematerialisation)", *Nordisk Museologi*, 1999.2, pp.55-64.

10) Hubert, François: "Ecomuseums in France: Contradictions and Distortions", *Museum*, No.148, ICOM (UNESCO), 1985, pp.186-190 中の p.188 による。

エコミュージアムと観光

しばしば日本ではエコミュージアムが商業主義的な観光事業として考えられることがあり、これは大きな誤解のひとつである。基本的にエコミュージアムは地域住民の内発的発展のためにあるもので、外部からの観光客に対して迎合することは本末転倒となる。もちろん観光地において、その地域の主要産業が観光である場合には、観光を無視することはできないが、外部からの観光客による収入を目的とした集客施設としての博物館の設置は、エコミュージアムの目的とは根本的に異なる。エコミュージアムの役割は、観光を通じて地域住民が自分の地域に誇りを持ち自らの地域の遺産を大事にし地域を育てる意欲を高めることによって、意識を活性化することである。この場合の活性化は経済的活性化だけを意味するのではない。

たしかに、ヘリテイジツーリズム、カルチュラルツーリズム、エコツーリズム、持続可能な観光などと呼ばれるものとエコミュージアムは、共通した考えをもつところがあると言える。これらの概念は、基本的に日本で多くみられる商業的な観光形態とは異なり、少なくとも観光によって自然や地域文化を切り売りした収益による地域経済の活性化を主目的とはしていないのである。

マッジ¹¹⁾らは、このような商業的な観光を異常な短絡的観光主義 (hetero-direct tourism) として、危険視している。イタリアの多くのエコミュージアムで試みられている観光地化の実態をまったく否定するわけではないが、あくまでも、長期モデルにおける目標が必要なものであって、観光収入による地域経済は短期的な戦略にすぎないことを忘れてはならない、との主張は日本にもそのままあてはまるものと言えよう。

おわりに——サンタクルスの騒乱

さて、冒頭に紹介したサンタクルスでは、実は、国際会議の行われた3カ月

11) Maggi, M. et al.: "The Future of Ecomuseum", *Preprint of Encontro Internacional de Ecomuseus*, II / ICOFOM LAM, IX, 2000, pp.92-97.

後に政変があり、エコミュージアムへの政治的な支援が断たれてしまった。エコミュージアムは現在かつてない苦悩の中にある。具体的には、国際会議を運営した文化センター長以下の職員が解任され、政治的に反対勢力下にある新しいディレクターは遺産とコミュニティとの強い結びつきを理解していないと言う。つまり、文化遺産の保護以外のコミュニティ活動を軽視している。この意識は、エコミュージアムを非文化的な段階に引きもどすものだという。

コミュニティ型ミュージアムの難しさはここにある。ユベール¹²⁾は、フランスのエコミュージアムを施設型エコミュージアムとコミュニティ型エコミュージアムとの2種類に分類し、前者は、従来の地域グループや地域の自治体等の公的組織などによるものであり、後者は参加型プロセスにより内発的な発展を指向するもので、民間の自発的な独立した組織によるもの、そしてこれは実は地域の政治勢力にとりこまれる危険性もあると指摘している。まさにこの危惧がサンタクルスで現実のものとなってしまった。

しかし、エコミュージアムの旧職員たちは、マタドウロの建物から本拠を追われた今、「マタドウロ文化的街区エコミュージアム」から「サンタクルス・コミュニティのエコミュージアム」に名前を変えて自主活動を続けていくことにした。財源的な保障と本拠を失ったことは損失だったが、限られた街区だけではなくコミュニティ全体をその名称に冠したエコミュージアムとして再出発したのである。彼らの言葉によると、遺産というものは歴史とコミュニティの未来をつなぐ「橋」である。その保全は、コミュニティの持続的な今後の展開を支えるために重要なものであって、その保存自体に目的があるのではない。歴史的な文化遺産の保存だけに着目することの不毛さを新しい政治家は理解していないらしい。

エコミュージアムはあくまでもプロセス志向であり、そのプロセスはけっして終わることのない運動である。そこに住む住民とコミュニティとともに生き続けていくのがエコミュージアムの宿命なのである。

12) Hubert (1985) 前掲書。

現代のまちづくりとは、更地に新たに何かを作るのではなく、すでに前もってそこにあるものを調整し、統合し、新たな平衡状態を作り出すこと、つまり社会秩序を再編成していく過程にこそある。社会的調整のプロセスこそ、既存環境におけるまちづくりの本質であると言えよう。エコミュージアムは、その存立基盤を領域=地域に求めることから、本質的には、このまちづくりと同様の意味を持っているのであり、あくまでも地域社会に状況づけられた創作行為なのである。この、近代化による忘れられてきたまちづくりの原点を、エコミュージアムが再認識させてくれるようにさえ思える。

都市問題バックナンバー 関連目次

第90巻第7号 1999年7月号 (定価750円・税込)

特集 自治体の芸術文化支援と文化ホール

なぜ芸術文化を税金で支援するのか?.....	片山泰輔
公共ホールのミッション(使命)を考える.....	吉本光宏
——「自主事業」対「貸しホール」から脱皮して「意志」ある運営を	
文化ホールをめぐる自治体文化行政.....	清水裕之
——複合問題としての地域の舞台芸術環境整備	
文化ホールと住民参加.....	太下義之
文化ホールの人材育成とアートマネジメント.....	美山良夫
公設民営劇場へのステップ.....	衛紀生
——変化の時代の公共文化施設	
静岡県舞台芸術センター.....	上野房子
——公立・プロフェッショナル舞踊団・専属劇場の実践	
世田谷パブリックシアター.....	太田由実
——創造と公共性を考える劇場	
美濃部都政の福祉施策と特別区制(7).....	日比野登